

## テドロス世界保健機関事務局長の再選

### ◆対立候補者がなく、再選が確実になったテドロス世界保健機関事務局長

2021年10月に、世界保健機関（WHO）の次期事務局長の推薦候補者を募集した結果が公表された。他には誰も候補者に推薦されなかったため、テドロス現WHO事務局長の再選が確実になった。出身国のエチオピアからの推薦はなかったものの、テドロス事務局長には28カ国から推薦が集まった。

22年1月に開催されるWHOの執行委員会により候補者に選定され、22年5月の世界保健総会の場で正式に指名されて、次期WHO事務局長に就任する。任期は22年から27年の5年間で、再選は一度しか許されない。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応では、いろいろと批判はあったものの、各国が内向きになるなかで、世界に向けた情報発信力が評価された形になった。

### ◆世界保健機関主導で、感染症流行の機会をとらえた国際共同治験の実施

17年に、アフリカ出身者では初めて就任して以来、テドロス事務局長は、世界的な感染症流行の対応に追われることになった。そのなかで、テドロス事務局長の指導力を示す事例として、感染症流行の機会をとらえ、WHOの主導で複数の国の施設が参加して実施される医薬品候補化合物の国際共同治験が挙げられる。

18年に発生したコンゴ民主共和国のエボラウイルス感染症流行の際には、まだ、有効性が確認されていなかった4種の薬剤（ZMapp、remdesivir、MAb114、REGN-EB3）を同時に評価する、初めての国際共同治験が行われた。4薬剤全ての薬効が確認され、MAb114とREGN-EB3の有効性が相対的に高いことが示された。

19年に発生し、現在も終息していないCOVID-19の流行下でも、Solidarityと名付けた国際共同治験を実施し、remdesivir、hydroxychloroquine、lopinavir/ritonavir、interferonには薬効がないことを示した。Solidarityが終了した後、新たに医薬品候補を募り、Solidarity PLUSと名付けた国際臨床試験を開始して、artesanate、imatinib、infliximabの薬効の評価を行っている。

テドロスWHO事務局長には、次期も引き続き、世界全体を見渡す公平な立場で、強い指導力を発揮してもらいたい。

【戸潤一孔】